

湯郷将和

遠雷と怒濤と



日本放送出版協会

湯郷将和

遠雷と怒濤と



湯郷将和 (ゆごう・まさかず)

本名 吉岡和雄

昭和6年 山口県萩市に生まれる。

山口大学，二松学舎大学中退。

現在 夫人とともに孔版印刷所を経営。

検印廃止

遠雷と怒濤と

定価一〇〇〇円

昭和五十七年三月二十日 第一刷発行

著者 湯郷将和

発行者 藤根井和夫

印刷 錦理想社印刷

製本 錦田中製本

発行所 日本放送出版協会

郵便番号一五〇

東京都渋谷区宇田川町四一

一 振替 東京一四九七〇一

(落丁本・乱丁本はお取り替えます)

© 1982 Masakazu Yugo

Printed in Japan

ISBN 4-14-005104-3 C 0093 ¥1000 E

目次

第一章 巨鯨を撃つ 五

第二章 血に染まった郷土 八〇

第三章 拙誠の人 一六七

あとがき 二四一

装幀 高須賀優

見返資料提供

『大津郡風土注進案』

(長門市教育委員会蔵)

遠雷と怒濤と

第一章 巨鯨を撃つ

一

薩長同盟の成立で明けた慶応二年は、長州藩にとって鯨の当り年でもあった。年明けとともに鰯鯨や長須鯨が群をなして長州北岸に出没し、浦々の鯨組は藩内の討幕熱に呼応するように豊漁に湧き立った。前年まで多い年でも五、六頭。四頭も捕獲すれば採算のとれる捕鯨だが、この年は各浦で十頭の大台を競う勢いだった。

長州の北岸は、冬の訪れとともに寒流に乗って日本海を南下する鯨の接岸点にあたり、往古より捕鯨が盛んであった。初期には沿岸の浅瀬に乗り上げた鯨を捕えたが、鎌倉時代より湾内で網に追い込む漁法に変わり、幕末には捕網の強化で湾内に入った鯨はほぼ確実に捕獲するようになった。

鯨組とは、長州毛利藩が捕鯨のため浦ごとに作らせた、いわば半官半民の捕鯨組合組織である。藩

は鯨奉行のもとに各鯨組の代表者を大庄屋とし、浦ごとに屈強の若者数十名を常時専従配備した。漁期に入ると、浦々には藩内各地からいわゆる季節労働者が集まって主に網方の補助労働に携わる。一頭の鯨を捕えるのに百人を超える人手が必要で、専従者は三分の一程度であった。その人集めが大庄屋の腕の見せ所でもあった。

藩は鯨組を御手組として取り立て、捕鯨船や漁網の買い入れには資金を貸し、組に扶持米を与えるという手厚い育成措置を施した。そして捕獲した鯨は、代官所の監督のもとに解体、販売された。肉は主に藩内で消費され、「鯨鱠」や「おばいけ」と呼ばれる郷土料理を生んだ。鯨油と細工ものに使う骨は、藩御用商人の手で大坂へ送られ、高値で取り引きされた。一頭捕獲するごとに藩は鯨組に歩合金を出した。関ヶ原で敗れた毛利氏が長州に移封されて以来、苦しい財政を補う手段として、幕府には内緒で蠟や和紙、長門皮と呼ばれる牛皮などの生産を藩の公営事業とし、専売体制を確立していたが、捕鯨もまた藩の重要な産業であった。長州藩は捕鯨事業で年間数万両の利益を上げ、多い年には十萬両を超えたともいわれる。

幕末に至り、藩の方針が攘夷討幕に統一されると、鯨組の若者たちはその勇壮な働きに注目されて、長州海軍の秘密予備軍としての訓練も受けることになった。十指に余る鯨組には剣技と鉄砲の指導者が配置され、日夜訓練を重ねて海戦に備えていたのである。

二月も終わりに近かった。仙崎湾の北面にかぶさる青海島の東南端に位置する通浦は、前夜の祝宴が夜更けまで続いたため、無人島のような静寂の朝を迎えた。鯨組創設以来といわれる八頭を捕獲し、

八頭目が七丈を超える記録的な大長須鯨とあって、鯨奉行から特別の褒賞金を賜わり、昨夜は浦をあけての祝宴となった。組の若者や季節労働者のもとより、引退して半農半漁の隠居暮らしを続ける年寄も残らず呼ばれた。萩の城下町から芸者を呼び、女房衆の手料理で飲めや唄えやの無礼講となつて、十六畳三間の襖を外した大庄屋宅は床も抜けるほどの騒ぎが続いた。

剣技指南を拜命した大山市之進も、代官所の役人や鉄砲指南とともに宴に招かれ、酔いつぶれて大庄屋早川権左衛門の屋敷に泊まった。朝鮮渡りの強い酒を加減知らずに飲み過ぎて前後不覚に陥り、正体もなく若者達と雑魚寝をしてしまった。長年の習慣で夜明けとともに目覚めた市之進は、屋敷を抜け出して一人浜辺に立った。放尿しながら身震いした。粉雪まじりの北風が日本海を越えて吹き寄せ、外海は鬼神のように白い波しぶきを踊らせていた。飛石のように連らなる小島に湾口を塞がれた仙崎湾内でさえ、身の丈を超える波が岸辺の岩を噛む。浜に引き上げられた三十艘あまりの捕鯨船が、極彩色の舷に淡い雪を載せて眠るように並んでいる。

「若先生、もうお目覚めですかい。お若いのに、ご立派でございますのう」

足音もなく背後から主の権左衛門が声をかけた。五尺八寸、二十貫の市之進と並ぶと、肩までしかない権左衛門だが、一重の紋付一枚で背筋を伸ばしている。鯨組関係者は驚くほど寒さに強い。

「なんの。早起きは三文の得じゃとか。わしも早う商いを覚えて、親父を楽隠居させてやらんと……」

「いや、若先生は商いに向いちよりませんのう。そのうち、藩の剣術指南番にお呼びがかかりますわい。ま、しばらくの辛抱と思うて、悠々と構えておいでなさいませう」

「――」

権左衛門の世辞には答えず、市之進は海を見やった。

市之進の父大山松三郎は剣技師範の家に育ったが、不遇のまま中年を迎え、二年前に藩命で捕網に使う苧麻調達の大庄屋となった。苧麻は苧、からむし、チョマとも呼び、山野に自生する多年草である。太平洋戦争末期、国民服の原料になった、あのチョマである。明木村、川上村を中心に豊富に自生するのを近在の農民に採取させ、加工処理して鯨組に収めるのである。鯨の捕網には当初藁を用いたが、破損がひどく、工夫を重ねたあげく苧麻が用いられるようになった。

幕命で商行為を禁じられている藩は、藩営事業に直接携わる藩士を士分から外し、表向きは商人として奉行の支配下に置いた。家禄は継承されるので、いわば半商半士の身分だが、松三郎の場合は他にも藩重役から密命を受け、それを苦にして別人のように暗くなった。折りから剣の修業に江戸へ出ていた市之進が目録を許されて帰郷すると、父は市之進に家督を任せ隠居同然の暮らしに入った。市之進は帰郷した翌日から苧麻調達に走り、また藩命で鯨組の若者に剣を教えることになった。

江戸から帰って一年、生来楽天的な市之進は身を不遇とも思わず、努めて商人になり切ろうとした。打ち続く藩内の政変を江戸で聞いていて、士分に厭気がさしてもいた。が、周囲の者は口を揃えて市之進を商人に向かないと言う。権左衛門だけでなく代官所の役人までが市之進を江戸で修業した剣客として扱うのも、彼には頭痛の種だった。市之進自身も紋付に帯刀して、町人鬚で歩く己に気恥ずかしさを消せない。

「若先生、一緒に墓参りをなさいませんか」

見ると権左衛門は火のついた線香を握っている。

「墓参りというと——」

「鯨の墓でございます。元禄の頃に、鯨の腹から出る仔を哀れんで墓を建てましてのう。以来、大庄屋は朝の勤めを欠かさぬことになっております」

権左衛門は市之進を促すように先に立って歩いた。浜伝いに東へ一丁ほど歩き、小高い丘の取りつきにある小さな庵に市之進を案内した。清月庵と書かれた粗末な山門の中に、「南無阿弥陀仏」と彫り込まれた高さ六尺ほどの供養碑があった。権左衛門は碑の前に香を供えて合掌した。浦の人々が手向けたのであろう、竹筒の花立てに水仙が花を開き、団子や干餅も供えてある。市之進は噂に聞いた鯨の墓を目の前に見て、浦の人々の情の温かさに胸を熱くした。市之進も合掌した。

「若先生、そのうちに一度、捕鯨船に乗ってみられませんか。なかなか面白いものでございますで
エ」

道を引き返しながら権左衛門が言った。

「そうだな。ぜひ一度、この目で見たいと思うちよったが、船に乗せてくれるか」

「そりゃ、もう。鯨組の若い者は、水軍のお侍なんぞ足許にも及びませんわい。あの魂消るような大仕事を、ぜひ一べん見てやって下さいや」

権左衛門が身を乗り出して言ったとき、不意に島の高台から半鐘が鳴り響いた。風と潮騒に混って余韻のない響きだが、明らかに鯨の遊弋ゆうよくを報らせる早鐘に違いない。

「ほう、また鯨が来りましたな。今年は鯨組始まって以来の大当り年ですわい」

権左衛門は掌をかざして湾内を凝視した。対岸の本土は小雪に視界を閉ざされている。権左衛門が一点を指さした。しかし市之進にはそれらしい形は見えない。

「あれは長須らしいな。こりゃ大物だ。——先生、それじゃ仕度にかかりますが、本当に船に乗りますか。今日はそれほど寒^{さむ}うもないようですが」

権左衛門が歩を早めて家に入ろうとしたとき、

「おうい、鯨だぞう」

若者が叫びながら、高台の物見小屋から飛ぶように駆け降りて来た。権左衛門を見るなり、

「親方、鯨ですぜ」

若者は声をかけただけで門内には入らず、また大声に叫びながら浜伝いに走り去って行った。しばらくすると十歳前後の男の子が数人、早川の門前に集まって来た。権左衛門の指図で子供は左右二組に分かれ、鐘を叩きながら、

「鯨が来たど、鯨が来たど」

と童唄でも唄うように呼号しながら散って行った。浜の触れ子は子供である。子供たちは一回の触れで十文を貰い、殆どの子が一文残らず母親に渡す、と市之進は聞いていた。

若者たちが腹ごしらえをして大庄屋の門前に集まるまでに小半刻かかった。早川宅では雑魚寝の若者や季節労働者が叩き起こされ、大混雑の中で握り飯が配られた。浜の女衆^{おんな}は鯨の遊弋に備えて、夜明けには食事の用意を終えている。浜では食うこと、飲むことで季節労働者にも差別や冷遇はしない。

漁期が終わると季節労働者には賃金の他に帰りの路銀と、底網を引いて獲れた魚を籠いっぱい持たせる。そんな手厚い待遇に感激して、農民は秋の穫り入れが終わるとまた鯨組へ働きに来る。危険な冬の海に乗り出す仕事だけに、漁民は長い経験から、船の上で反目が生ずるのを最も恐れているのだ。

飯を食い終わった者から素肌に芥子を塗り、綿入れ筒袖の胴着を着、厚い股引を穿いた。権左衛門は市之進にも同じ身仕度をさせた。門前には酒樽が持ち出され、身仕度を整えた若者に次々と一合の枅酒が配られた。

「若先生、無事を祈ってのお神酒ですから、ぜひお一つ」

権左衛門に枅を渡されて市之進も飲んだ。唐辛を底に沈めてあるとかで、飲むと全身に不思議な温かみが拡がった。

一同が関の声を上げ、浜の小屋から網を運び出した。芋網になって軽くなったというのだが、総量三千貫という網は途方もなく大きい。その頃には浜の老人や女たちも集まって来て、巨大な網の運搬に手を貸した。網を惣階船（網船）に結び、一艘ごと荒波の只中へ押し出した。一艘に漕ぎ手三人と五人の網方が乗り、十艘の惣階船が仙崎湾を閉塞する形で一線に並ぶまでに一刻半を費した。その頃には勢子船三艘が磯伝いに仙崎湾の奥へ向けて漕ぎ出した。

惣階船が出終わると、今度は手に手に銚を構えた屈強の若者十数名が五艘の捕鯨船（追船）に分乗して漕ぎ出した。細長い丸木船のような追船には五本の櫓が備わり、五人の漕ぎ手と指揮者、銚打ち三人が乗る。

「若先生、清太郎と一緒にお乗りなせえ」

権左衛門が叫んだ。市之進は総指揮をとる若年寄磯部勘助の船に、権左衛門の一粒種清太郎と乗った。長さ三丈五尺、幅七尺五寸の捕鯨船は、十人を乗せて木の葉のように揺れながらも快速で沖へ進む。四艘の捕鯨船が後に続いた。

「若先生、船は初めてでございましょう」

剽軽者ひょうきんものの勘助が冷やかし半分に言った。

「なあに、江戸行きの折りには三田尻から大坂まで船じゃったし、帰りは伊豆を船で回ってえらい目に遭うた」

「若先生、捕鯨船は乗合船のようにには行きませんや。下手をすりゃ、鯨に頭突きを食わされて、海中へ放り出されますでエ」

わざとらしく勘助は首を振って、にと白い歯を見せる。いつか雪は止んで、鉛色の空にわずかながら青空が覗いていた。本土の山々も姿を見せてきた。通浦かよひの家並が拳ほどに小さくなった。

「ほう、近いぞ。二頭いるな」

眩くなり、勘助が白い旗を掲げて大きく振った。それを合図に、後方で横に並んだ惣階船が、捕鯨船を取り囲むように漕ぎ出してきた。捕鯨船は鯨を追ひ、二手に分かれて仙崎湾の奥へ進む。しかし市之進には、まだ鯨の姿が見えない。強がりを言ったものの、沖へ出ると胸が苦しく、やたらと吐き気が襲った。湾の中央部へ出ると、高波が捕鯨船を弄ぶ。それでも若者たちは疲れを知らぬように力いっぱい櫓を漕ぎ続ける。

ふいに先頭に行く勘助の船のすぐ前で、海面が大きく異様に盛り上がり、巨鯨の上半身が現れた。

鯨はゆっくりと呼吸を整えて、巨大な尾を海面に露出し、また海の底に消えた。

「よおし、いくぞ」

勘助が白旗を大きく旋回させた。前方には舷を叩きながら寄せて来る勢子船が見えた。捕鯨船を囲むように半円陣形を描いていた惣階船が、いっせいに輪を締めながら、なおも湾の奥へ突き進む。今度は遙か前方に鯨の頭が見えた。

「ありや、もうあそこまで泳ぎよったんかい」

思わず市之進が口走ると、

「あいつは別の鯨でござえますよ。二頭入っちゃりますな」

勘助がまた笑った。

既に湾内の奥深く進んでいた。船の左舷十間ばかりのところに、また鯨の頭が浮き上がった。

「それ、一番銆／＼」

叫びながら勘助が赤旗を振りおろした。並んで漕いでいた二番船が、一瞬、全速力で巨鯨に突進して行った。舳先^{へさき}に立った若者が銆を投げた。八尺の大銆が鯨の横腹に刺さり、黯^{くろ}ずんだ冬の海に血の色が見えた。勘助は赤旗を大きく旋回させた。惣階船が捕鯨船を包むように迫って来る。銆を受けた鯨は大きく身震いして、狂ったように巨大な尾で海面を叩き、水中に没した。銆に結んだ罌網^{かき}が物凄^{おそろ}い速さで海中に吸い込まれて行く。

「よおし、二番銆用意／＼」

呼吸を計っていた勘助が大声で叫んだ。鯨が曳く綱を若者が握った。次の瞬間、二番船は鯨に曳か

れて走り出した。その方向を見定めて、他の四艘は横に開きながら二番船を追った。十艘の惣階船は船乗りの顔が見えるほどに近づいた。その中央部に陣取った二艘の惣階船が、突然大きく揺れて後方に引かれた。

「網に入ったぞオ。それ！」

勘助は舳先に仁王立ちになり、声を枯らして旗を振り続ける。網に触れた鯨が向きを変えたのか、二番船の若者が握る綱が緩み、船は波間に静止した。他の四艘は二番船よりかなり遅れて海面を漕いでいた。

勘助の船の右舷に、また鯨が浮き上がった。

「清太郎さん、ええか！」

「おう！」

いつのまにか着衣を脱ぎ棄てた清太郎は、銆を構えて舷に立った。櫓を握る若者たちは全身を弓のように撓よこわせて力いっぱい漕ぐ。鯨の巨体にあわや接触するまで近寄った。瞬間、掛け声とともに清太郎が海中に身を躍らせた。市之進は息を呑んだ。思わず棒立ちになって清太郎と巨鯨の接触した海面を見つめた。清太郎の体重ごと突き出された銆は、巨鯨の脇腹に深く刺さった。鯨は身をよじって海中に消えて行った。市之進の背後に巻いてある綱が舷を軋きませながら海中に消える。

清太郎が船に上がって来た。

「やった。手応えあったでエ」

手早く湯気の立つ体を拭ぬぐい、白い歯を見せた。